

Series には、Farhang-e Pahlavi (Pahlavi-Persian Dictionary)
Vāženāme-ye Bondehešn (Glossary of pahlavi Bundashishn),
Manzūme-ye deraxt-e āsūring, Farhang-e Hezavārshāya
Pahlavi あり、中世ペルシャ語の研究も行われている。

他のSeries には、Philosophy and Mysticism in Iran, Science in
Iran, Manuscripts, Sources of Iranian History and
Geography, Persian Language and Literature, Arabic
Glossaries, Folklore あり。

5. 最後にテヘラン市の一風景。イラン高原の北部アルボルズ^{アルボルズ}の南麓の盆地にあるイラン第一の都会。西欧風の住宅あり、20階建の高層ビルもあり、人口ほぼ300万位の中近東最大の近代的な都会である。先帝Reza Shahの徹底的改革の結果か、まるで西洋にいる様な感じ。
最近、道行く若い女性も、とんぼのような大きな「眼鏡」をつけ、「ミニスカート」(ペルシャ語でmini-zūp. 勿論zūp. はフランス語のjupe より。因にペルシャ語の近代に於ける借用語の第1位はフランス語)を身につけている。

その中にmini-nāf, mini-meme になるのだそうです。(タクシーの運転手の話による)。
Nāf の方はNavel。Memeは分語でpeštān。この方は英訳をつける訳にいかないので
学究心のある方は、H. Haim のThe One-Volume persian-(ハイフン)English
Dictionary を参照されたい。1961年版だとその847頁の右の欄にあり。演説と何とかは適当に短い方が良いでしょうで、ではこの辺で。

～ 終 ～

ペロポネソスの旅

関 本 至

1967年9月下旬、ギリシャ滞在予定日数も残り少なくなつたある朝 私はアテネを発つてペロポネソスへの一人旅に出た。コリントス、ミケネー、エピダウロスなどペロポネソス東北部の旧跡はアテネからの日帰り旅行ですでに一応見学をすませていたが、残る地方はまだ訪ねる機がなかつたのである。

アテネのペロポネソス停車場を9時に出発するオリンピア行きの列車に乗る。列車ははじめ北へ

北へと走るので、ふと心配になつたが、線路がアテネの郊外を北から西、さらに西南へと大迂廻してペロポネソスへ向うのであることがやがてわかつた。エレウシスの工場地帯を過ぎると、間もなくサロニコス湾とその海岸線が左眼下に展開する。ついでコリントスからさきはペロポネソス半島の北岸に沿つて西へ西へと進み、車窓からは絶えずコリントス湾の碧い海が眺められ、白い砂浜が見えがくれる。実に美しい風景である。列車は必らずしも正確とは言えないが、ほぼ時刻表に近い時間で運転、午後4時オリンピア駅についた。(現代音でオリンピアである。)

駅に一人の老人が立つていて、自分のホテルに来いと言う。はつきりしたスケジュールもなく、別に宿の予約もしていない、いわば定めない旅なので老人について行く。クロニオンという、駅のすぐ近くの小さい宿である。荷物を部屋に置くやいなや、すぐにとび出して博物館を訪ねる。小じんまりとしてはいるが、オリンピアのゼウス神殿破風の数々の美事を彫刻などを並べた宝庫である。ついでクラテオス河の橋を渡り、オリンピアの遺跡を訪れる。数本の石柱が立っているほかは、ほとんど廃墟と言つてよく、ゼウス神殿のあたりには巨大な柱石が倒れたまま累果と横たわつている。松籟の響と蟬の鳴き声が聞えるだけである。見物の人影もまばらなオリンピック・スタジアムのあたりまで行き、堤の青草の上に腰をおろすと、何か古代の中に身をおく思いさえするのであつた。暮れてしまつた頃宿に戻り、夕食をとる。ウェイトレスの一人が話しかけてきて、姉が日本人の記者と結婚して、いま千葉県の大柏にいると言う。そして日本の風景はこのあたりととても似ているとその姉さんが言っているなどと話す。

ギリシャの他の地方と異り、この西部ペロポネソスは、樹木が多く、畑も青々としていて、たしかに日本と似たところがあることを私も先刻から感じているところであつた。

明るく朝、蚊と鶏の鳴き声で目をさました。部屋の窓近くすぐ目の下に百姓家らしい家がある。貧しそうではあるが、のどやかな農家の朝のたたずまいが感ぜられる。8時45分オリンピア発予定の列車が、実際には9時頃発車。カラマタ行きの切符に、駅長が料金を44(tessarakonta-tessares)と純正語で書き込みながら、口ではsaranta-tesserisと民衆語で呟いているのを聞いて面白いと思つたことである。アルフィオスという小駅で乗りかえる(同名の河がオリンピアの南を流れている)。はじめイオニア海に面しつつ、ついで山の中を、列車は一つ一つの駅に停車しながら進む。女子学生とおぼしい二人づれのギリシア人が、私が手にしているペロポネソスの地図を見せてくれと言う。そしてお礼にだろうか、スヴラーキ(串焼き肉)を二本くれた。それを食べていると、乗り込んで来た男が「カラマタ・バイ?」とたずねる。「カラマタ行きですか」ということらしい。他の乗客同志の会話にも「ホーラ・バイ?」というのがあつた。「ホーラ行き(ですか)?」であろう。バイは「ビエノ」(私は行く)の3人称単数形pa(g)i「(それは)行く」であろうが、バイはどのような形だろう——などと考えたりしながら、全く日本的な

と思われる窓外の景色を眺めているうちに、12時半頃ペロポネソス南部の港町カラマタに到着した。馬車に乗って町はずれのアクロポリスに行き、その近くの修道院を訪ねる。馭者がとくに案内してくれたのである。入口を入るとき、帽子を脱いだ馭者の敬虔な態度が印象に残る。

3時30分カラマタ発のバスに乗る。バスの運転席の上方にはマリアの像がかざつてある。ボブラの並木道、桑畑、水田など、このあたりの風物も全く日本的である。山を越えるとまたイオニア海が見えはじめ、5時頃ピーロスに着く。海岸通りに宿(ホテル・ネストル)をとる。すぐ前はナヴァリノン湾である。1827年10月8日、27隻より成る英・仏・露の連合艦隊が、82隻からなるトルコ・エジプトの連合艦隊を壊滅させ、ギリシア独立戦争に決定的なポイントを描いたのがこの湾においてである。今でも沈没した艦船の幾つかがこの湾の中に沈んでいるということである。この湾と、それをイオニア海から守っている無人のスファクティリア島の眺めも実に素晴らしい。街に出て船会社の代理店をしているとかいう人につかまる。ちよつと寄れというので行つてみると、日本人の名刺が何枚もあり、近くこのあたりに日本と合併の造船所か何かができるのだという。

翌朝9時15分のバスに乗り、町の北方にあるネストール王宮に向う。小高い丘(エングリアノス)が発掘され、これがホーマーに名高いネストールの王宮跡と考えられているのである。ここは1939年アメリカの考古学者ブレーゲンによつて多数のミノア文字Bのタブレットがギリシア本土では始めてのものとして発見されたことでも有名なところ。交通もやや不便だし、見学者の姿もまばらである。オデュッセウスの息子テレマコスが、帰らぬ父を求めてここネストールの王宮を訪ね、その折彼が沐浴したとホーマーにうたわれたその風呂だと言われるものまでが発掘されている。昼頃ピーロスに戻り、再びバスでカラマタへ。実は私にとつて、特殊な方言の話されているマニ半島を訪れることがペロポネソス旅行の重要なプランの一つであつた。だが聞いてみるとそこを訪れてスパルタに廻りその日のうちにアテネに帰ることは困難なようである。しかも二日後にはアテネで人に会う約束が待つてゐる。残念ながら割愛せざるをえない。ではスパルタへはどうして行くか。タイゲトス山脈をタクシーで越えるには6,000円はかかるという。そこで迂廻してトリポリス経由で行くことに決心、2時半カラマタ発、5時トリポリス着、美しい広場で少憩ののち、6時15分にアテネから来たスパルタ行きのバスに乗り継ぐ。バスの中は乗り合わせたギリシア人のかまびすしい会話と陽気な笑い声が絶えない。——古代のラコニア人(スパルタ人)は寡黙で知られていたのに、何かそぐわない感じがするのだつた。途中で日はとつぶり暮れ、真暗な山道を進む。ちよつと心細い気持ちである。やがてバスは平地へと下りはじめ、町の灯が見え出し、8時少し前にスパルタに着く(現代語ではスパルティである)。行きあたりばつたりメネライオンというホテルに泊る。(今までに泊つたどのホテルとも同様、由緒ある名がついているわけだ)。

朝になつて部屋の窓を開けると、眼前に嵯峨たるタイゲツスの山肌が望み見られる。なるほど、スパルタ精神というものもこのようなきびしい環境の中でこそつちかわれたものであつたかと合点の行く思いがするのであつた。博物館を訪れ、タクシーでミストラへ行く。これはタイゲツスの山麓斜面にビザンティン時代末期に大いに栄えた都市のあとである。

ギリシアのポンペイともいわれ、中腹にパンタナツサという尼寺があるほかは、すべて住居、王宮、寺院の廃墟である。まことに凄絶といつた感じ。急坂をよじ登る大急ぎの見学で、汗は流れ喉はからからに渴く。山を下りて飲みものでもと思つたが、アテネ行きのバスに間に合うためには休憩のいとまもない。2時スパルタ発のバスに乗りアテネへの帰路につく。羊群を追う老牧人、葡萄畑におり立つ農夫の姿などを車窓にくり開けながら、岩山また岩山の峯々や谷々をバスはひた走りに走つた。行き交う車の数もきわめて少い。道は所々で鉄道の線路と交差するが、一本のチェーンが線路の上にそれと直角に置いてあるだけ。汽車が来るとそれでこんどは道路をさえぎるのであるのか。1日に数えるほどしか列車の通らないそのあたりだからこれでいいのだろうが、ともかくのんびりした風景であつて、何か前世紀の世界を旅しているような感じすらする。アテネに着いたらもうすっかり日が暮れていたが、ここは人と車で雑踏する20世紀のメトロポリスであつた。

老

人

ミ リ ヴ ィ ー リ ス

岡 野 純 訳

リカベツスの広場に面した古い街区にある私の家の窓の外わずか数歩のところ一本の松の木があつて、われわれはそれを「老人」と呼んでいる。腰は屈み、髪は薄く、人が好くて忍耐強いおじいさんに、これほどよく似た木はほかのどの広場にも見られなかつた。

この思いやり深い老木が子供たちにとつてどんな魅力があるのか、それはわからない。

この街区には沢山の繁つた松の木があり、また多ぜいの喧しい子供たちがいる。しかしほかのどの樹木もそのまわりにこれほど数多い子供仲間を集めてはいなかつた。なぜというに、それは腰の曲つた大木で、枝につかまらずにその背中に登れるからである。だからそのまわりには学童たちが、髪に蝶形リボンをつけた少女らや、肩に鞆をかけた少年たちが集まつてきていつもさまざまのいたずらをしてその木をいためつけるのであつた。

「老人」はその背中に、一度に五六人の子供をのせていることがたびたびである。枝の間で彼らはひな鳥のように声を立てたり、青い松葉をむしりとつたりする。そのために「老人」は葉の茂みのまん中がはげになつてしまつていた。